

# 「読解力」を培うための発想の転換

——表現者の立場から読み解くテキスト——

三 藤 恭 弘

## 一 はじめに

新学習指導要領が告示され、いよいよ「読解力」について論議される機会も多い。周知のように「PISA型読解力」はこれまでの読解力の概念を越えた広義の読解力として定義されている。その対象は広く、読み手の評価や表現まで範疇に入れようとするものであり、これまで言わば認識力と呼ばれてきた力にもむしろ近いと考えられる。それは実の場における生きるための力であり、これまでもこれからも重要な力であると考ええる。このような力を育成するには「読み手としての主体」の育成が欠かせない。そのためにはテキストに読み込まれない何かを読み手自身の中に持ちうるものが重要だと考える。

そこで筆者が重視したのは読み手としての主体者の中にさらに一歩進んだ「表現者（書き手）」としての力量を養うことが重要ではないか、ということである。「表現者（書き手）」として自らの中に表現すること（書くこと）の力（文章構造のスキーマ／テンプレート）

を有するものは力強い。情報を発する側の意図、構成、表現を自らのスキーマ／テンプレートと比較しながら、その真偽や価値についても評価できると考える。

筆者はこれまで「物語の創作／お話づくり」の教育力や魅力について、実践や考察を行い、機会を頂き報告してきた。

しかし、それらは「書くこと」という表現教育の視点からの考察であった。そこでこの度は「読解」という理解の側面からこれまでの内容を再度考察し、「読解力」の育成と「表現力」の育成の関係について考えてみたい。

## 二 「物語の創作／お話づくり」の魅力・有用性

児童が「国語」や「ことば」に興味を抱くこと、好きになることは高い国語力の基盤になると考えられる。そして学習指導要領（解読書）でも、そのような関心や態度こそが「国語科の究極的なねらい」であると謳っている。

筆者の勤務校では〇六年度～〇八年度において、全校的に「物語

の創作／お話づくり」に取り組んできた。

○八年二月のこの取り組みに対する児童の意識調査の結果があるが、中でも五年生は八七％もの児童が「とても楽しかった」「楽しかった」と答えている。

なぜ、こんなにも児童は「物語の創作／お話づくり」を好むのであろうか。

森田信義は述べる。<sup>①</sup>

「わたしたちは、生きているかぎり表現する存在であり、生きている証として表現し続けるのである。」

児童（人間）は本来「表現をしたもの」だということ。そしてその原理がスムーズに「学び」に応用されるのが「物語の創作／お話づくり」であると考えている。

ヴィゴツキーは述べている。

「文学的創造が、自分の創造的意欲と習熟を練習しながら人間の思考、人間の感情、人間の内面的世界を形成し伝えるための最も詳細にして複雑な武器、つまり人間のことばを子どもにも獲得させることができる」と。<sup>②</sup>

(\*傍線は引用者による。)

物語の創作は決して易しい行為とは言にくい。無からひとつの完成形と呼べるものにまで創りあげるのとはそれ相應の労力を要する。それはある意味言語の基礎的基本的事項を総合的に活用する行為であるとも言えるし、またこの行為のさなかに基礎的基本的事項が鍛えられるとも考えられる学びである。

しかし、この行為・活動に児童が好んで取り組むわけであるから、

これは指導者にとって大変有用性の高い学習活動と言うことが可能ではないだろうか。

さらに内田伸子は次のように述べている。

「既存のものを乗り越えるような新しいものを創るためにはこの想像力の働きが不可欠になる。」<sup>③</sup>

学習指導要領の国語の目標にも掲げられながら、「想像力」についてはこれまで二次的な扱いであったような印象を抱いている。だが、先の読めない二十一世紀を切り拓いていくには、この「想像力」や「創造力」といった力が重要な鍵になってくることは確かであろう。

### 三 表現者の立場から読み解くテキストとレトリックを学ぶ

「物語の創作／お話づくり」のカリキュラムの中で「表現と理解の表裏一体性」を強く再認識することとなった単元に「情景描写のレトリック」「心情描写のレトリック」がある。

これらの単元は児童に情景や心情の描写のレトリックを学ばせたいと考えて行った単元で、それらを学ばせるには読み書きを関連づけ「良い作品に出会わせ、それらから表現の素晴らしさを学びとらせる」ことが必要であった。この単元の指導案を考察してみたい。

#### (一) 情景描写のレトリックの学習指導案(略案)

##### 1 単元名 情景描写のレトリック

##### 2 目標

○情景の描写について「きれい」等の形容詞をできるだけ使わず、

<p>3 学習の展開（省略して掲載）</p> <p>学習活動（○教師の発問・予想される児童の反応）</p>	<p>導入</p> <p>1 ところどころ虫食いになった「むぎばたけ」（アリスン・アトリー）のテキストを教師が読む。</p> <p>2 めあてを確認する。</p>	<p>開</p> <p>3 「むぎばたけ」を題材にして学ぶ。</p> <p>○本文の1、2行目を読んでみます。 「あたたかい、かぐわしい夏のゆうべ。空にはお月さま。星が二つ、三つ。その光に丘の原っぱは一面」 ① （でした。）</p> <p>○さてみなさんなら（ ） ①（ ）の中にどんな文章を入れますか？ ・なんだろう・海のような ○アリスンの原文はこうでした。 「その光の原っぱは一面青白い銀のシートをひろげたみたいでした。」</p> <p>○どうですか？ ・とてもきれいな感じ・うっとりする ○「銀のシート」のような言い方をなんと言ったでしょう？ ・「比喩」</p> <p>○この「銀のシート」という比喩のおかげでこの丘の原っぱは「きれい」と言わなくても「きれいな様子」がとてよく伝わってきますね。</p> <p>（以後省略。同様に表現のレトリックを学ぶ。）</p>
---	---	---

情景をよく観察して本質に迫り、ていねいに事実を描いたり、比喩を用いたりして情景を描写することが大事だと学ぶ。

### 3 学習の展開（省略して掲載）

学習活動（○教師の発問・予想される児童の反応）

1 ところどころ虫食いになった「むぎばたけ」（アリスン・アトリー）のテキストを教師が読む。

2 めあてを確認する。

「きれいな情景」を人に伝えるには、どう表現したらよいか学ぶ。

3 「むぎばたけ」を題材にして学ぶ。

○本文の1、2行目を読んでみます。

「あたたかい、かぐわしい夏のゆうべ。空にはお月さま。星が二つ、三つ。その光に丘の原っぱは一面」 ①  
（でした。）

○さてみなさんなら（ ） ①（ ）の中にどんな文章を入れますか？

・なんだろう・海のような

○アリスンの原文はこうでした。

「その光の原っぱは一面青白い銀のシートをひろげたみたいでした。」

○どうですか？

・とてもきれいな感じ・うっとりする

○「銀のシート」のような言い方をなんと言ったでしょう？

・「比喩」

○この「銀のシート」という比喩のおかげでこの丘の原っぱは「きれい」と言わなくても「きれいな様子」がとてよく伝わってきますね。

（以後省略。同様に表現のレトリックを学ぶ。）

### まとめ

4 学習のまとめをする。

○今日のまとめをします。

「きれいだな」と思うことを伝えたい時、「きれい」とか「美しい」とかいう言葉をすぐに使わず、様子やものごとをよく見て、見たままを「言葉でスケッチ」しましょう。それらを「比喩」で表現するのもいいですね。

この後児童の中には「書き方を学ぶ」とは「読むこと」でもある、という意識が生まれていった。

このように「書くこと」の向こうには「読むこと」が控え、「読むこと」の向こうには「書くこと」が控えるという「スパイラル」な読み書き関連指導がスムーズに成り立つところに「物語の創作／お話づくり」の魅力がある。

## 四 表現者の立場から読み解くテキストと評価の力

「表現と理解の表裏一体性」を強く再認識することとなった別の単元に「物語の評価」の単元がある。

次の資料は児童がアンデルセンの「雪の女王」を読んで「作品を四つの項目（テーマ・材料・構成・表現）に分けて評価した時のワークシートである。（♡は自分の思ったこと・評価を。◆は自分ならどう書くかという提案を書いている。）

注目したいことばを抜き出してみる。

## ワークシート (評価)

かほりレベルの高低  
評価の力です。

◇書きやすいところから書きまじょう。(6)年(3)組 書けないところがあってもかまいません。

観点	I (テーマ) (たいこと)だえ	II (話のネタ)	III (段落や場面) (構成)	IV (書き方) (表現の理)
♡よかったところ(よくあったところ) ♡自分ならどう書くか? ♡及ばないと思うところは、あきらめず に、書き直してみよう。かよかったです。 ♡二人だけじゃなく、四人くらいの方が、すず けのある話にした。	♡雪の女王が氷のようなキスをした時、 カイは驚しかった事や、それが何となく わずかしてしまったという感じが、いい ♡雪の女王が氷のようなキスをした時、 カイは驚しかった事や、それが何となく わずかしてしまったという感じが、いい ♡雪の女王が氷のようなキスをした時、 カイは驚しかった事や、それが何となく わずかしてしまったという感じが、いい	♡鏡のかけらが宝石にかわるような、もう少し不思議な話にし たい。 ♡鏡のかけらが宝石にかわるような、もう少し不思議な話にし たい。 ♡鏡のかけらが宝石にかわるような、もう少し不思議な話にし たい。	♡美しい場面、金馬車に乗る場面、 胸にはかきやい、胸に手をのせて、 美しいと感動した場面、 ♡美しい場面、金馬車に乗る場面、 胸にはかきやい、胸に手をのせて、 美しいと感動した場面、 ♡美しい場面、金馬車に乗る場面、 胸にはかきやい、胸に手をのせて、 美しいと感動した場面、	♡可承連と、いろいろな場面、 ♡可承連と、いろいろな場面、 ♡可承連と、いろいろな場面、 ♡可承連と、いろいろな場面、
(A/B/C)	B			

## (二) テーマについて

「♡友達を助けたいと思ったり、あきらめずに探している二人の『きずな』がよかった。」

この話のテーマを「きずな」という一言に集約しているところが

なかなか鋭い。

## (二) 材料(話のネタ)について

「♡雪の女王が氷のようなキスをした時、カイが楽しかった事やゲルダのことをわすれてしまったというアイディアがいいと思った。」

「♡話のほとんどがすごく不思議な感じで『鏡のかけらがとけたりする』というような所があつてすごく良かった。」

◆鏡のかけらが宝石にかわるような、もう少し不思議な話にしたい。」

様々なアイディアを話の要素(材料)にとらえ、それらのアイディアが話の「不思議感」を醸し出していることに気づいている。自分ならさらに不思議な話にしたいと、「宝石」にかわるようにしたいと述べているところも優れている。

## (三) 構成について

「♡場面ごとに変わった人物や物、出来事などがあつて、楽しいし、ゲルダの『見つけて会いたい』という心の思いがすごく伝わってきた。(どの場面も)」

◆『金の馬車の中に、ピスケットやおかしもつめてあった』という所はこの話に全然関係ないと思うから、私だったら書かない。」

構成に関しては、場面ごとの人物配置や出来事がいかに効果的にゲルダの「会いたい」思いを表現しているかを高く評価しているの

がよくわかる。また、「金の馬車の中にバスケットやおかしがつめてあった」という場面については、全体の話の流れの中で「全然関係ない」と評価し、「私だったら書かない」とまで言い切っている。この部分からも、この児童の中に「表現者」としての「自信」や「評価の力」がかなり育ってきていることが理解できる。まさに「表現する力」を手に入れることでワンランク上の読みの力を手に入れることがわかる資料である。

#### (四) 表現

「『美しいと感じた物をそのまま『美しい』と書かずに、『咲き香る』や『きらめき』などの言葉を使っているところがよかった。』

ここにカリキュラム中の「情景描写のレトリック」の学習が生きている。「美しさ」を読者に伝えるためには「美しい」と書くのではなく、その情景の美しさを描写することで伝える、というレトリックを自分のものにしていく。

「『『永遠』という言葉を書く意味がよくわからない。』

「『もう少しわかりやすい言葉を入れて物語がよくわかるようにしたい。』

アンデルセンの物語にさえ、「読まれる」のではなく自分の感性によって主体的に読み、評価している。確かにこの「永遠」のことは評価の分かれるところで、「永遠」という言葉を「かっこいい」と評価した者と、「なぜ『永遠』である必要があるのか、そこに必然性があるのか」と考えた者がいた。この児童は後者であった。

このように表現したいという元来人がもっている欲求を学習に応用することで、主体性をもった「ことばの力」が児童の中に育ち、また「表現者」としての力量が「読者」としての力量をさらに一歩押し上げることが理解できる。

## 五 ま と め

青木幹勇は著書「子どもが甦る詩と作文―自由な想像Ⅱ虚構Ⅱ表現」で、

「虚構の作文は、子どもたちを新しい表現の世界へ導くのではないでしようか。」

「わたしはフィクション作文を書くことのメリットとして想像力の育成を強調しましたが、もう一つ大切なことがあります。それはこの作文が読むことと、書くことをつなぐ、つまり理解と表現の一体化にとつて大きく機能するということです。」<sup>4</sup>と述べている。

筆者は一連の学習において、「読むこと」の指導の最中、「書くこと」がこの先にめあてとして意識されている児童（つまり「表現者」であることを意識している児童）の学ぶ意欲、吸収していく力、その効率の良さについて着目した。

「物語の創作／お話づくり」はテキストのスキーマやレトリックを学ぶことを求め、それはすなわち「読解の力を自ら培う」という読み書き関連学習を自然に形成していく。

「読むこと」と「書くこと」を「表現者」というキーワードで結び

つけていくことは、現在求められる読解の力を効果的に養っていく  
ひとつの方法として注目に値する。今後とも研究を深めていきたい。

(参考文献)

- (1) 森田信義『表現教育の研究』溪水社 1989 p.1
- (2) ヴィゴツキー『子どもの想像力と創造』新読書社 2002  
p.120
- (3) 内田伸子『「ことばと学び」』金子書房 1996 p.205
- (4) 青木幹男『子どもが甦る詩と作文―自由な想像⇨虚構⇨表現』  
国土社 1996 p.16